

福生市史の目指すもの

福生市史代表編集専門委員 北原進

一 歴史編さんの立場と視点

自治体の歴史編さんに、最も大切なことは三つあると考えます。一は、その発想が住民の生活に根ざし、将来の自治体住民の生活を展望する視点をはずさないこと、二はその上に立って、編さん過程が住民・自治体職員・研究者の共同作業による積み重ねであること、三は、その自治体史の完成時に、調査・収集した史・資料類の保存・利用機構が整備され、学習・研究体制が継承できることです。

戦後、といってもすでに四〇年を経過していますが、この間に日本史学は大きな転換と発達をとげました。庶民の生産活動や生活実態に眼を向け、地方史（または地域史）の立場で書かれるようになり、あるいは史・資料類が中央の政治的文献だけでなく、各地に散在する古文獻、遺物や遺跡、伝承・習慣等々、多種多様かつ多量なものを対象に採り入れ、詳細な実証的研究がなされるようになりました。さらに調査し執筆するのを、専門研究者にのみまかせておかず、多くの人たちが直接間接、いろいろな形で加わり協力しあって実現を目指すようになってきました。

福生市史においても、同様な方向で編さんを進めて行きたいと思っています。私たち編集専門委員会が発足して、最初に取組んだ仕事が、市史編さん大綱案の作成でした。この案はもちろん編さん委員会でも

討議され、確定しておりますが、私たち委員にとって大綱は、編さんの方針や基本的態度を律するものであり、編さん条例のみならず市民憲章をもふまえて、趣旨を鮮明にしようということになりました。福生の歴史を編さんするのですから、ある種の福生市中心主義に立ちますが、それは決して、古いお国自慢ではなく、自分たちをも客観的にみつめることができる、科学的な立場を貫きたい。そしてその結果は、現代の自治体史をリードし、新時代に長く活用し続けられる市史でありたいと考えました。

したがって編さん大綱には、現状認識として地球規模での技術的革新と不安が同時に存在し、その中で市民が平等・平和な二一世紀を目指して努力していることを挙げました。それは福生市民の伝統的営為でもあろうと、私は思っています。だからこそ世界史・日本史の流れの中で、市民の視座からの歴史を編さんしようという方針をかかげたのです。

二 提案を生かして構想を

抽象的なきれいな事を言うのは簡単ですが、このようなことはかけ声倒れに終る危険もあります。私たち専門委員会として、みずから注意しなければなりません。それこそ市民からの批判や協力を仰ぎたいところです。私は市史編さんを市民の歴史学習、歴史の研究と創造の運動と考え、立派な厚い本を作る事業だけに終始したくありません。このことは市当局や諸委員会関係者等からも、御了解頂いたところで、この市史研究誌の公刊も、その一環なのです。

ある方は、多摩川が現在の我々より、もっと生活に密着していた時代、どうして、どの様に密着していたのかを書くように、と言われました。子供の頃、川で遊んだ懐しい思い出だけでなく、農業や交通・人

物史等から考えても、重要なテーマがここにあるとみて、提言されたのです。またある方は、学校のこと、先生方のプロフィールと生徒・子供たちの生活は、市民の最も関心を寄せる点だからと、特に教示して下さいました。多くの市民が、福生市で小学校・中学校の時代を送り、近年新しく市民になった方たちも、わが子を福生の児童・生徒として育てようとされているのですから、当然のことです。これまた懐旧のみならず、次代の市と市民のためにも、できるだけ制度と生活の両側面から総合的に記述したいものです。難しいけれども意義深いテーマの山が、ここにもあります。

域内に住居址や土器しか残さなかった人々が、多摩川や丘陵地・武蔵野で狩猟生活を営んでいた原始時代、律令国家の年貢や防人の出征に苦しんだ古代、武蔵七党の騎馬が往来し、熊川・牛浜の郷村も姿をみせてくる様になった中世、玉川上水が貫流し、百姓数が増えた割りには生産がなかなか向上しなかった近世、そして多くの青年たちの参加した自由民権の運動で、多摩全土が燃えた近代を経て、幾多の戦争によってなお、域のかなりの部分が戦争と平和のぎりぎりの接点に立っている現代、……こうした全時代をつらぬいて、市民の生活の態様と条件を、また地域の自然的・社会的・政治的環境を、体系的に私たちはまとめ上げねばなりません。構想はやがて提示致しましょう。

しかし、これは容易なことではありません。当り前のことですが改めて痛感するのです。先述の様に、多くの市民の方々からさまざまな提案と批判を頂きたいゆえんです。あわせて、どうか暖い御協力と御鞭撻をも下さいますように、お願い致します。

昭和六〇年七月